

(2) ペリネイタル・ロスを経験した父親の心の整理のあり様とそのきっかけ

川崎医療福祉大学大学院 保健看護学専攻 修士課程 ○植村 良子

川崎医療福祉大学 保健看護学科 中新美保子

【要 旨】

1周産期医療の発達により、周産期死亡率は昭和30年の43.9から平成21年には2.9と大きく減少した。日本では死産や新生児死亡について隠されることが多い文化的な背景があるため、周産期死亡を経験した母親や家族はケアの対象として認識されない時期があった。欧米では、1980年代より周産期の死別を経験した母親に対しての研究が進められたが、日本では、1990年後半になってから研究が報告されている。しかし、これらはすべて母親を中心とした研究であり、父親については子どもを亡くした父親の語りから体験を表したもの（今村，2012）、子どもの死の実感のプロセス（柱田，2011）の2件であった。これらの研究では父親は悲しみを押し隠しながら父親と夫の役割を果たしているため社会から見過ごされ、時に父親自身も気づき得ないために父親もケアの対象とすることが示唆されている。また危機

的状况にある母親にとっては、夫の支えは大変重要である（木村，2005）ことやパートナーからのサポートが得られないという母親の認知と周産期喪失後のPTSDとの間には有意な相関関係がある（堀内，2006）と報告されている。このことから父親のケアをすることは、父親だけではなく母親の悲嘆過程の回復にもつながり、ペリネイタル・ロスに対するよりよい看護への示唆を得ることにつながると言える。

本研究はペリネイタル・ロスを経験した父親の心の整理のあり様とそのきっかけについて明らかにすることを目的とした。対象はペリネイタル・ロスを経験した父親3名である。半構成的面接法によるインタビューを実施し、質的記述的帰納的に分析した。その結果、父親の心の整理のあり様のきっかけとなる事象が明らかとなった。